

1. 夏秋キュウリの摘果について

1. 背景と特徴

本県の夏秋キュウリ栽培面積は約400 haあり、収穫期は7～9月で収穫最盛期は8月中旬となり、京浜地区の消費の少ない時期に出荷量が多く、この時期の価格は低迷することが多い。また青果市場の休日対策として出荷調整の必要があり、収穫期間中の摘果の効果を検討したので参考に供したい。

2. 技術の内容

8月上中旬の高温期に開花当日のものを摘果する。摘果開始後7～8日で収量が低下してくる。摘果日数は1～5日の範囲で目的によってきめる。

3. 普及上の留意点

- (1) 8月上中旬の高温期の収穫盛期に行うが、青果市場のお盆休みなどの休日による価格の変動をみて安値対策として行う。
- (2) 品種は、ときわ北星とする。
- (3) 摘果することにより、総収量が多少減収となる。

4. 試験成績の概要

- (1) 試験課題名 夏秋キュウリの摘果効果
- (2) 試験年次および場所 昭和50年 岩手県園芸試験場本場
- (3) 試験方法

摘果法および摘果月日

- ① 標準区
- ② 5回区………8月5, 6, 7, 8, 9日の連続5回
- ③ 3回区………8月6, 7, 8日の連続3回
- ④ 1回区………8月5日の1回

※各区とも摘果当日開花したものを摘果対照とした。

(4) 試験結果

8月上旬の摘果で1回、3回、5回のいずれの方法でも摘果開始後7～8日目まで収量が低下するが、摘果回数(摘果量)の多いほど低収の日が続き、標準対比で8月11～15日で5回区51.4%、3回区72.0%、1回区62.9%と減収がみられた。この傾向は16～20日、5回区で70.8%、3回区で77.9%であったが、1回区は113.7%で

あった。総収量では標準より5回区が8.5%，3回区で2.7%，1回区で5%の減収となり摘果回数による傾向的な差は明らかでないが、摘果による減収傾向が見られるが、大きい減収とはならない。

5. 主要成果の具体的データ

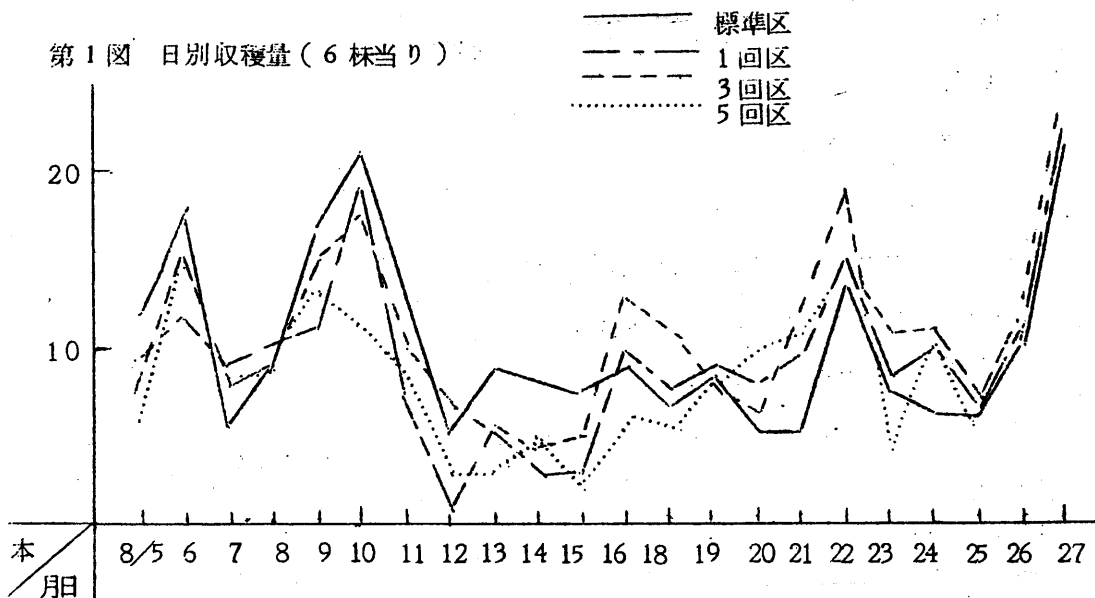
第1表 日別摘果数(6株当り)

試験区	月日	8月5日	8月6日	8月7日	8月8日	8月9日	合計	摘果比率
標準区		0	0	0	0	0	0	
5回区		14.3	11.7	7.0	7.0	7.0	47.0	319.7
3回区		0	19.0	7.0	8.6	0	34.6	235.4
1回区		14.7	0	0	0	0	14.7	100

第2表 日別収量および標準対比(6株当り)

試験区	月日	8.12	8.13	8.14	8.15	8.16	8.18	8.19	8.20	計
標準区	実数(本)	13.3	5.3	9.0	8.3	7.3	9.3	6.0	8.7	67.2
	比率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100
5回区	実数(本)	9.0	3.0	3.0	4.6	2.3	6.7	5.7	8.0	42.3
	比率(%)	67.7	56.6	33.3	55.4	31.5	72.0	95.0	92.0	62.9
3回区	実数(本)	10.7	6.7	5.3	3.0	3.0	9.7	7.1	8.7	54.2
	比率(%)	88.5	126.4	58.9	36.1	41.1	104.3	118.3	100	80.7
1回区	実数(本)	7.7	1.0	5.7	4.3	5.0	12.7	11.0	8.0	55.4
	比率(%)	57.9	18.9	63.3	51.8	68.5	136.6	183.3	92.0	82.4

※18日の収量は17、18日の2日分の収量



第3表 時期別収量調査(6株平均本数)

試験区		月日	8/5~9	11/15	16/20	21/25	26/30	9/1~5	6/10	計	収量比
標準区	良果		23.7	26.0	19.3	19.3	31.3	20.0	10.4	150.0	100
	曲果		18.9	20.4	9.0	11.9	30.3	14.4	9.4	114.3	100
	くず果		16.0	13.7	3.9	5.6	7.4	14.7	8.0	69.3	100
	合計		58.6	60.1	32.2	36.8	69.0	49.1	27.8	333.6	100
五回区	良果		17.6	10.6	12.4	29.3	32.3	18.2	11.3	131.7	87.8
	曲果		13.1	11.6	6.4	9.1	30.7	16.6	10.6	98.1	85.8
	くず果		19.8	8.7	4.0	5.3	14.0	15.0	8.7	75.5	108.9
	合計		50.5	30.9	22.8	43.7	77.0	49.8	30.6	305.3	91.5
三回区	良果		18.9	18.4	16.7	24.3	32.9	15.7	9.1	136.0	90.7
	曲果		21.4	13.7	7.4	12.0	33.0	23.0	7.4	117.9	103.1
	くず果		18.4	11.0	4.4	6.7	6.7	15.3	8.3	70.8	102.1
	合計		58.7	43.1	28.5	43.0	72.6	54.0	24.8	324.7	97.3
一回区	良果		16.9	14.3	20.6	22.4	28.4	22.4	9.4	134.4	89.6
	曲果		15.3	13.9	11.6	14.7	35.4	14.6	6.9	112.4	98.3
	くず果		19.7	9.6	4.4	7.6	9.3	14.0	5.7	70.3	101.4
	合計		51.9	37.8	36.6	44.7	73.1	51.0	22.0	317.1	95.0

第4表 時期別収量比(標準比)

試験区	月日	8/5~9	11/15	16/20	21/25	26/30	9/1~5	6/10	合計
標準区		100	100	100	100	100	100	100	100
5回区		86.2	51.4	70.8	118.8	102.5	101.4	110.7	91.5
3回区		100.2	72.0	77.9	116.9	105.2	109.9	89.2	97.3
1回区		88.6	62.9	113.7	121.5	105.9	103.9	79.1	95.0

※6株当り収量

2. 野菜類の稲わら施用について

1. 背景と特徴

野菜栽培において最近堆肥が不足していることから、畑地における施用について、48~50年にわたり夏秋キュウリ、夏秋トマト、49~50年にキャベツ、短根ニンジンを試供して秋、春稲わら施用を行ない、堆肥施用と比較した結果、堆肥施用と同等の収量が得られたので参考に供したい。